

美術の窓(96)

宗達画の魅力

—友の会特別鑑賞会に寄せて—

大和文華館館長 水田 徹

本館所蔵の宗達画「芥川図色紙」は近世日本絵画の名品の一つとされます。この度、春の第一回展を機に友の会特別鑑賞会を催し、とりわけ琳派の作品をじっくり観賞いただくことになりました(詳細は本号末尾の案内をご覧ください)。実り多い鑑賞会への一助になればと念じ、ここに改めて同色紙の魅力の一端をご紹介します。

「芥川図」は『伊勢物語』第六段を描いた三枚の色紙で、「昔男ありけり」に始まる概略以下のような物語を絵画化しています。

永年思い続けた女をやつとの思いで盗み出し、背負って芥川にさしかかった時、女は草の上に宿る露をあれは何かと問いかけるが男はこれに答えず先を急ぐ。やがて夜も更け雷さえ鳴り出したので道端の倉に女を押し入れ、男は戸口を守っていた。ところが夜中に鬼が出て女に食いかかり、女はあなやと叫ぶが悲鳴は雷音にかき消されて男には聞こえない。翌朝女の姿はすでになく、男は悲嘆にくれ

白玉か、なにぞと人のどひし時、

露とこたへて、消なましものをと詠う。前日、草の上の露を白玉かと尋ねられたとき、あれは露だと答えてやり、私もはかない露のように、一緒に消えてしまったかった、というわけです。

本館所蔵の色紙はこの最初的情景を描いたもので(図3)、画面下方に群青も鮮やかに芥川が流れ、萱草に宿る露玉が(当初の銀が酸化し今は黒点に見えます)二人を取り巻くように打たれる。

画面中央やや左寄り、広い袖越しに女は腕を男の首に回し頬を寄せる。目鼻は細い筆線を引き重ねた簡潔なもので、一見、平安絵巻以来の「引目鉤鼻」を思わせます。しかしオリジナルに目を凝らすと、女の目は目頭部に筆先でごく小さく瞳を入れ、やや伏し目がち、口は朱を指した下唇の上方に薄い墨線を斜めに引き明らかに半開きになっています(図4)。辺りに光る露に目を遣り「あれは何か」と囁いているところです。

一方、男は優しく女に振り向きませんが口はつむぎ、視線は目頭寄りに打たれた瞳が示すように、女の半開きの口

元に注がれます。駆落ちる男女の夢心地を一面の金地で象徴しつつ、二人の眼差しのかすかな交錯、口の動きの僅かな違いはやがて起こる悲劇を予感させ、男の無念を深く静かに暗示します。

次の一枚(図2)は画面上方に雷神が躍り出る。その姿態や相貌は北野天神縁起絵巻など先行美術の先例を参考にしているといわれますが、手足と目線は第一景の男女に向けられており、本来は一枚づつ独立した図に描く色紙を、宗達はここで二枚続きに構想したに違いありません。松の幹もねじれんばかりに轟く雷鳴が前段の優しく夢のような情景と好対照をなします。

三枚目が第三景(図1)。書き込まれた詞書は前二者とは別筆とされますが、先の二景と合わせ画面の全体構想は宗達の手に戻せられましょう。倉の戸口に女の衣と黒髪だけが覗き、女はすでに鬼に喰われたか、喰われる運命にあることを示します。弓を手に戸口を守る男はしかし雷鳴轟く天を仰ぎ、その眼差しはここでも女には向けられません。第一景の男女の眼差しの交錯が悲劇の発端を垣間みせ、ここでまた男の視線がドラマの悲劇性をいや増します。

ドラマの三面続きの展開は画面構成と賦彩法にも及びます。構図は雷神を頂点に第三景の男と第一景の男女を左右の隅に据え、全体が

よその三角形をなし、その右角に、これとほぼ相似形の小三角形が第一景の男女によって繰り返されます。登場人物の目線もこの三角形を辿って第三景の男から雷神を経て第一景の男女に到り、さらにそこで、頬寄せ合う男女の眼差しの交錯に収斂します。

しかも注目すべきことにこの大小二つの三角形はいずれも色紙面に平行ではなく、頂点が画面の奥に引っ込んだ奥行きをもっています。それは雷神の出現に勢いを与え、第一景では男女の眼差しの交錯、心の襲の動きに場を提供する役目を果たしています。

賦彩は第一景を金地を主体に僅かに緑青の土坡を配し、恋人たちの夢幻の世界を演出しつつ、女の黒々とした衣と川の紺青が悲劇の到来を予兆させ、第三景は比較的写実的な色合いを用いて悲劇の現場を再現します。第二景は金地を多用しつつも暗雲と松を写実的に着彩し、夢と現実の中間、雷神が舞う天界を表します。

美しくも大胆な色遣い、計算され尽くした画面構成、そして登場人物の入念な眼差し表現によって紡ぎ出された高度な造形、それがこの三枚の色紙に、物語の単なる成りゆきの説明を越えた深い味わいを付与し、もって宗達画を日本絵画の頂点の一つに仕立て上げていると申せましょう。

どうか友の会特別鑑賞会をじっくりお楽しみ下さい

図1 俵屋宗達、芥川図色紙 個人蔵



図2 俵屋宗達、芥川図色紙 個人蔵



図3 俵屋宗達、芥川図色紙 大和文華館蔵



図4 同、部分図



季刊 美のたより No.154

平成18年4月1日

発行 大和文華館